

Title	ドイツ絶対主義期の領邦関係をめぐる人文学的考察：バイロイトとプロイセンが目指した"理想郷": 人文地理学会2008年大会発表論題・配布資料
Author(s)	川西, 孝男
Citation	(2008)
Issue Date	2008-11-09
URL	http://hdl.handle.net/2433/156065
Right	This is not the published version. Please cite only the published version. この論文は出版社版ではありません。引用の際には出版社版をご確認ご利用ください。
Type	Presentation
Textversion	author

101 ドイツ絶対主義期の領邦関係をめぐる人文学的考察

100026 —バイロイトとプロイセンが目指した“理想郷”—

Approach of The humanities about regional relationship in German Absolutism Era

—The Elysium both Markgraf city of Bayreuth and Kingdom of Prussia—

川西孝男 (在ドイツ・オーバーフランケン歴史協会員, 京都大学・院研究生)

KAWANISHI Takao (Historischer Verein für Oberfranken e. V. in Deutschland, Graduate Researcher of Kyoto University)

キーワード: バイロイト, プロイセン, ドイツ領邦絶対主義, フリードリヒ大王, ヴィルヘルミーネ辺境伯妃

Keywords: Bayreuth, Prussia, German Regional Absolutism, Friedrich the Great, Markgäfin Wilhelmine

I はじめに

ヨーロッパの絶対主義における理論研究は、第二次世界大戦終結を境に大きな転換点を迎え、ドイツにおける絶対主義の概念を形成する「領邦絶対主義」のもつ領域・地域的視点によるものが主流となった。また、その地域内における領邦文化にも研究が及んでいる。

ドイツのブランデンブルク=バイロイト辺境伯領は、「閉鎖領邦」として領邦絶対主義支配が貫徹される要素が極めて高く、その宮廷文化は極めて個性的な様相を呈していた。18世紀初頭のゲオルク・ヴィルヘルム辺境伯はバイロイトの湖周辺に理想都市ザンクト・ゲオルゲンを建造し、祝祭文化や音楽芸術に際立つ都市として変貌させた。このバイロイトに嫁いだのがプロイセン皇女ヴィルヘルミーネであった。



Markgäfin Wilhelmine (1709-58)

この兄弟によってバイロイトは当時のヨーロッパそして世界の芸術文化に触れることができた。

ヴィルヘルミーネ以前のバイロイトはザンクト・ゲオルゲンを除けば、開発途上の離宮エルミタージュのほかにも目立つものではなく、総じて中世ドイツ的な堅牢かつ質素なものであった。彼女はまず、エルミタージュの完成を目指し始めた。1735年にその内外装を一新し、幾何学模様の花壇を作り、室内をロココ風に作り変え始めた。また、「日本の部屋」と呼ばれる一室には、仏教色豊かなアジア風の壁画や天井画が描かれ、ヴィルヘルミーネの関心や興味が東洋にも向けられていたことを窺わせる。また、ザンクト・ゲオルゲンの湖上では祝祭が続けられ、ヴィルヘルミーネはバイロイトに栄えた芸術文化を継承しようとした。



(18世紀の Prussia (図表右) と Bayreuth (左下))

II ヴィルヘルミーネ辺境伯妃とフリードリヒ大王

この婚礼によってプロイセンとバイロイトの連携が強化された。一方、プロイセンでは1740年、芸術や学問に高い関心を持ち、後に啓蒙専制君主として大王と称されるヴィルヘルミーネの弟フリードリヒ2世が王位を継承した。



Friedrich the Great (1712-86)

III サンパレイユとサンスーシ

ヴィルヘルミーネとその夫フリードリヒ辺境伯は、バイロイト西方の山岳狩猟区に目をつけ、離宮として改造し、「サンパレイユ (比類なき)」と名付けた。ここに庭園を持つ東洋の館を建て、あちこちに天然あるいは人工の洞窟を置いた。また、山岳地帯に大型のゲルマンの古代劇場を建造するなど、ヴィルヘルミーネの見果てぬ世界がまさに比類なきものを現出させ、趣向を凝らした離宮となっている。この頃、大王がポツダムに離宮「サンスーシ (憂いなき)」を建造したが、これらはともにロココ式であり、兄弟が才知と贅を尽くして芸術を競っていたのである。

(史料提供: オーバーフランケン歴史協会)



the Great in Sanssouci

IV プロイセンとバイロイトにおける大歌劇場の建立

ヴィルヘルミーネはミューズとして芸術を守護だけでなく、自らもオペラ作曲を手がけた。さらに彼女はこれらの上演や各国の一流の演奏家や歌手をバイロイトに招くに相応しい歌劇場の建設構想に関わり、ベルリンで1743年に王立歌劇場が完成すると、彼女は弟の大王にバイロイトに歌劇場を建造するための支援を要請した。この歌劇場は当時のウィーンやドレスデン、ベルリンの歌劇場と、その規模と華麗さで肩を並べていた。王宮所在地を除くならば、18世紀半ばにヨーロッパ最大の地方歌劇場がバイロイトに存在していた。

この歌劇場の落成式は1748年、最愛の一人娘とヴェルテンブルク大公との挙式に際して行なわれたが、この席にはオーストリア継承戦争で勝利し、その名をヨーロッパに知らしめた大王の姿があった。彼らは、凱旋を祝う市民に迎えられながら歌劇場に大型馬車に乗って訪れたという。1754年にも大王はこの歌劇場を訪れ、ヴィルヘルミーネ作詞による祝祭劇の初演を観劇している。このバイロイトの黄金期を象徴するオペラは、光明と暗黒の世界が抗争し、太陽神アポロ率いる光明の世界が勝利を収めるというものであるが、光明の勝利は当時の啓蒙思想の勝利を意味していた。



Markgräfliches Opernhaus, Bayreuth

V 7年戦争とヴィルヘルミーネの死

1756年にプロイセンは大王の下、7年戦争に突入した。英国の軍事支援はあったものの、周辺国すべてを敵にまわすといった無謀とも言い得る戦いであった。バイロイトもプロイセンに味方したが、ほとんど孤立無援の状態にあった弟へのヴィルヘルミーネの心労を察することができる。

激戦の続く中、ヴィルヘルミーネは永久の眠りにつく。当時の悲しみを伝えるのは、死去の数日前に大王が彼女に当てた手紙である。この時期、彼もまた戦場で大敗を喫しており、バイロイトそしてプロイセンも、このミューズの死とともに苦難の時代の始まりを予感した。また当時バイロイト一帯では高インフレが起き、市内のアカデミーが経営難で閉鎖、さらにアン斯巴ハに辺境伯の居城が移され、バイロイトの斜陽が決定的となった。

VI 領邦文化を支えた兄弟愛

ヴィルヘルミーネは、バイロイトにヨーロッパの様々な芸術や文化をもたらし、高い精神芸術性を持つ都市へと変貌させた。彼女がバイロイトをアテネにしようと試みたとの指摘がある。また、フリーメイソンへの深い傾倒など彼女には宗教や国境を超えた精神芸術への志向すら窺える。ヴィルヘルミーネは、バイロイトに様々なヨーロッパの精神や内外の芸術を結集させる一方、フランス宮廷文化の影響を受けたサンズーシに象徴される大規模な土地造成による大宮殿の建設といったプロイセン的な芸術理念に対し、ドイツ・ゲルマン的な山深い森林地帯の生命力や自然の造作をふんだんに活かしてバイロイト・ロココを完成させた。彼女は自然環境と人間の芸術文化の調和、共存を目指した「比類なき」精神芸術都市を構想していたのではなからうか。

このようにバイロイトの黄金期には彼女の弟である大王の大きな支援があった。辺境伯歌劇場創設の際の支援はもとより、宮殿が火災で滅失した際も、すぐに彼はバイロイトを助けた。生涯のほとんどを戦争と外交に明け暮れた大王は姉ヴィルヘルミーネが心の支えであった。彼はサンズーシに姉への変わらぬ敬愛を表した「友愛寺院」を建造させ、彼女の像に語りかけていた。このように、当時の2人の絆がプロイセンとバイロイトを結び付けており、大王にとってヴィルヘルミーネの住むバイロイトこそがその精神的支柱であった。



Schloss Sanssouci, Potsdam



Neues Schloss der Eremitage, Bayreuth